



私が目指す「建築設計」

～建築設計との出会いから、事務所開設、そして現在までの軌跡を振り返る。～

有限会社C.A.P DESIGN

代表取締役 門内 一生

広島工業大学専門学校
建築グラフィック専攻科 平成11年卒

■根拠はないが、自信はあった

私の場合、20歳になるまで建築の世界へ進むなんて思ってもいませんでした。高校を出て、大学に行って、どこかの会社に勤めるんだらうなって、漠然と将来を考えていたんです。ですが、2年連続で大学受験に失敗し、「自分は一体、何に向かって、どう生きようとしているのだろう」と真剣に悩むようになりました。どうせなら、好きなことをとことんやってみたい。じゃあ、自分が好きなことって、何だろう。そう突き詰めていくと、デザインの分野が選択肢に残りました。ただデザインといっても幅広く、あまりにも曖昧なので、自分が考える「デザイン的なもの」として、クルマ、CDコンボ、家の3つのテーマを選び、それぞれのデザイン案をまとめ、家族や友人たちに見せて感想を聞きました。最も評価の高かったのは、家のデザインでした。それは崖っぷちに建った家で、内部がスキップフロアになっているという、いま思えばとても稚拙なものでしたが、自分の中で妙に腑に落ちる感じがありました。建築家を志すことに、根拠はないが、自信を持てたんです。そこで、30歳までに独立しようと目標を立て、工大専に進学しました。

■在学中に初仕事を体験

目指す道は決まったものの、もともと文系だし、建築的な知識などまったくない。そんな状態で勉強し始めたのですが、自分でも驚くほど、すんなり吸収できました。結露が発生するしくみ、音響や色彩、構造など、学ぶ内容が実に具体的で、どれもちゃんとした理論や根拠の裏付けがある。高校時代、物理は大嫌いだっただけなのに、構造計算はとても楽しかった。教えてくださった先生方にも感謝しています。提出した作品は必ずじっくり見てくれて、的確にアドバイスをいただけたし、木に関しては誰にも負けないというくらい博識な先生もいらっしゃいました。建築が大好きな人間が集まって同じ時間を過ごしている。そこが何より素晴らしかった。

工大専では3年目に専攻科へ進みましたが、仕事として最初の設計依頼を受けたのは実はこの頃だったんです。クライアントは高校時代から行き着けだった美容院のオーナーさんです。以前からお店を建て替える時は設計させてください、と声をかけていたのですが、本当に任せていただけるとは思っていませんでした。私は「美容院とは何ぞや?」という根本から設計コンセプトを練り始めました。

■動と静のバランス

照度をはじめ、椅子と椅子の間の距離、スタッフの方々の仕事内容などを質問したり、調べたり。美容院としての機能性を重視したうえで、他の店にはないインパクトをどう形にするか。

夜になるとオーナーさんと打ち合わせを重ね、その場でスケッチを書き、自宅に戻ってパソコンに向かう。そんな毎日を過ごしながら、半年間を費やして設計を完成させました。スタッフや利用客を含め、建物の中にいる人たちを浮き立たせ、美しく見せたい。そのために建物を「静」、人を「動」ととらえ、そのコントラストとバランスを追求した結果、見つけた答えが、白を基調に、赤と黒の3色だけで構成した空間でした。



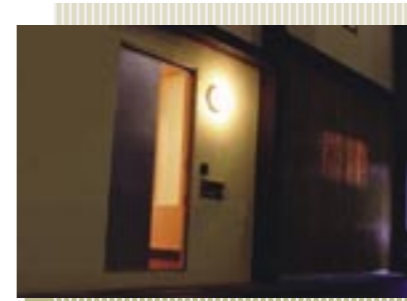
運良く最初の仕事を経験できたとはいえ、いきなり独立するわけにもいかず、工大専卒業後は、ツテも情報もないまま、タウンページを開き、やみくもに建築家の個人事務所へ直談判。ほとんどは断られました。それでも机を貸してくれる事務所は見つかりました。一般の会社と違って、新卒で正社員というケースは少ないのがこの世界です。3ヵ月働いて初めてもらった給料が5万円。いくつかの事務所

を転々としながら、プロの実務を覚えていきました。

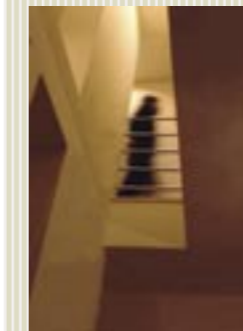
■省くことで、生まれるもの

転機になったのは、在学中に設計した美容院が竣工した半年後でした。白を基調にした美容院は今ではよく見かけるものの、当時はまだ珍しく、評判になったことも幸いし、実績として認められ、次の仕事の依頼を受けました。日中は建築事務所で働き、夜中は個人の仕事に取り組む毎日でしたが、4軒目の依頼が来た時点で独立を決めました。27歳になっていました。

その後は、美容機器メーカーからショールーム設計を任されるなど、実績が実績を呼び、仕事が軌道に乗っていきました。最初の作品の頃から芽生えていた自分なりの設計スタイルもはっきりとした輪郭を持ち始めました。依頼主の要望をよく聞き、吟味したうえで、合理性と機能性を追求し、ムダな要素を思い切って省くこと。それが私の基本スタンスです。例えば広島都心のある美容院では、受け付けと待ち合いスペースを省き、代わりにバーカウンターを設けることで、2つの機能を兼用させました。カウンターなら対面で接客できるし、カフェの提供という新しいサービスも生まれます。また、大阪市で建てた賃貸用の個人住宅では、玄関ホールを省き、土足で使えるサイドリビングに仕立てることで、スノーボードを磨いたり、飾るなど趣味を楽しむスペースとして活用可能になりました。(※編集部注:この作品は雑誌「ブルータス」の住宅特集でも紹介されました。)



●西淀川の家:大阪市にある築70年の古民家を再生。玄関内の空間を土間風のサイドリビング化することで、「靴を脱ぐ場所」だけでなく、趣味を楽しめる空間に。



■理想の空間を追いかける

独立して3年が経った現在まで、100軒近くの設計を手がけました。仕事量がピークになった昨年からは、下積み時代に出会った仲間の高橋 洋一氏(広島工業大学卒)と2人で取り組み、全国住宅実施設計コンペで1位入賞を果たし、着工段階に入るなど、新しい実績も築くことができました。今後の目標は、仕事の内容と年齢を比例させていくこと。この10年を振り返ると、インターネットや携帯電話を例にあげるまでもなく、私たちの生活環境は大きく変わっています。ですが、建築の世界ではLDKの様式が根強く残ったままです。店舗、戸建て、マンションなど、求められる要件や機能は異なりますが、ひとつひとつのケースで、固定概念にとらわれることなく、理想を形にしていきたい。そう考えています。(談)

※この文章は、門内一生さんへのインタビューをもとに、談話として再構成したものです。

●HUT+HOUSE(小屋のある家)
東京の建築会社「ウィークエンドホームズ社」による設計コンペで選ばれた作品。中庭をはさんで、母屋と小屋が向かい合う住まいで、小屋と母屋2階リビングは連絡通路でつながる。小屋は施主の親戚・友人の宿泊スペースに活用できるほか、子どもが成長した将来は「子屋」にもなる。

